

# 関西国際大学機関リポジトリ

## KUISs-MAPS

Title	青年期以降に発症した1型糖尿病をもつ人のレジリエンス尺度の開発と信頼性・妥当性の検証
Author(s)	岩下, 真由美
Issue Date	2024.3.12
Degree Name	博士（看護学）
Degree Grantor	関西国際大学

## [論文内容の要旨]

論文題名 青年期以降に発症した 1 型糖尿病をもつ人のレジリエンス尺度の開発と信頼性・妥当性の検証

専攻分野 療養支援看護学分野

氏 名 岩下 真由美

指導教員 岡光 京子

第 1 次研究で青年期以降に発症した 1 型糖尿病をもつ人のレジリエンスの内容を明らかにし、第 2 次研究で青年期以降に発症した 1 型糖尿病をもつ人のレジリエンス尺度を作成し、信頼性・妥当性を検証した。

### I. 青年期以降に発症した 1 型糖尿病をもつ人のレジリエンスの内容（第 1 次研究）

**目的：**本研究の目的は、青年期以降に発症したレジリエンスの内容を明らかにすることである。

**方法：**研究参加者は、糖尿病専門外来に通院している青年期以降に発症した 1 型糖尿病患者 21 名であった。レジリエンスの内容について、半構造化面接を行い、面接内容を質的帰納的に分析した。面接内容は対象者の許可を得て録音し、逐語録を作成し、1 型糖尿病をもつ人のレジリエンスの内容を表す記述を抽出し、コード化し、カテゴリー化した。

**結果：**93 コードが抽出され、10 カテゴリーに分類された。

**考察：**本研究で明らかになったレジリエンスの内容は、青年期以降に発症した 1 型糖尿病をもつ人の心理面を捉えており、これらのカテゴリーを構成しているコードは、青年期以降に発症した 1 型糖尿病をもつ人のレジリエンス尺度構成概念に用いることができると考えられた。

### II. 青年期以降に発症した 1 型糖尿病をもつ人のレジリエンス尺度の開発と信頼性・妥当性の検討（第 2 次研究）

**目的：**本研究の目的は、第 1 次研究で明らかになった青年期以降に発症した 1 型糖尿病をもつ人のレジリエンスの内容をもとに、青年期以降に発症した 1 型糖尿病をもつ人のレジリエンス尺度（以下 1 型糖尿病をもつ人のレジリエンス尺度と略す）を作成し、信頼性・妥当性を検証することである。

**方法：**糖尿病看護認定看護師 2 名および 1 型糖尿病患者 1 名に、第 1 次研究で明らかになったレジリエンス尺度を確認してもらい、内容妥当性と表面妥当性を検討した。調査対象者は糖尿病専門外来通院中の 252 名と 1 型糖尿病セミナー参加中の 1 型糖尿病患者であった。

調査内容は、1 型糖尿病をもつ人のレジリエンス尺度 91 項目と成人発症 2 型糖尿病の療養に伴うレジリエンス尺度 (Murakado et al., 2013) の合計 118 項目を用いて作成した無記名自記式質問紙で、専門外来通院中またはセミナー参加中に依頼した。得られた回答の項目分析、最尤法プロマックス回転による因子分析を行ない、構成概念妥当性の検討をした。信頼性を確保するために、1 型糖尿病をもつ人のレジリエンス尺度の下位尺度ごとに Cronbach の  $\alpha$  係数を算出した。最尤法プロマックス回転による因子分析の結果作成された 1 型糖尿病をもつ人のレジリエンス尺度と成人発症 2 型糖尿病患者の療養に伴うレジリエンス尺度 (Murakado et al., 2013) における合計得点について、ピアソンの相関係数を算出し、基準関連妥当性を検討した。

**結果：**本研究対象者は 168 名であった。1 型糖尿病をもつ人のレジリエンス尺度 91 項目のうち、歪度・尖度が著しく高かった計 4 項目を削除し、87 項目とした。1 型糖尿病をもつ人のレジリエンス尺度 87 項目を用いて因子分析を行った。因子分析の妥当性を示す KMO は 0.67 であり、因子分析の妥当性が認められた。87 項目中、第 1 因子 18 項目、第 2 因子 12 項目、第 3 因子 5 項目、第 4 因子 5 項目、第 5 因子 7 項目、第 6 因子 3 項目の合計 50 項目が基準を満たした。

因子名は第 1 因子【柔軟に捉える力】、第 2 因子【未来に抱負をもつ力】、第 3 因子【家族や友人からのサポート力】、第 4 因子【1 型糖尿病を受容する力】、第 5 因子【良好な血糖コントロールを維持しようとする力】、第 6 因子【同病者から得られる原動力】と命名した。

1 型糖尿病をもつ人のレジリエンス尺度 50 項目の尺度全体及び下位尺度別の各下位尺度の Cronbach の  $\alpha$  係数は、全体で 0.875、各下位尺度において 0.865、0.845、0.857、0.865、0.757、0.820 であった。本尺度と成人発症 2 型糖尿病患者の療養に伴うレジリエンス尺度 (Murakado et al., 2013) の総得点間での相関係数 (Pearson) は、 $r = .556$  ( $p < .001$ ) であり、有意な相関があり、基準関連妥当性があることが認められた。各因子得点間の相関についても有意な相関関係が認められた。

**考察：**本尺度の信頼性、および内容妥当性、表面妥当性、基準関連妥当性が確認されたと考えられる。また本尺度の内容は、高樽ら (2014) のレジリエンス概念分析の結果である、「個人特性」「対処する力」「捉え直す力」の内容を支持するものであることから、構成概念妥当性が確認されたと考えられる。本尺度は、既存のレジリエンス尺度を用いたものではなく、1 型糖尿病をもつ人に直接インタビューを行い、尺度原案を作成した。突然の発症からインスリン注射を打ちながら血糖コントロールをしなければならない生活が始まるという、1 型糖尿病をもつ人の心理面を測定する内容が含まれている。さらに小塩ら (2002) の示す「肯定的な未来志向」を測定できる内容も含まれている点から、日本における 1 型糖尿病をもつ人のレジリエンスの状況を反映した尺度であるといえる。

**キーワード：**1 型糖尿病をもつ人 青年期以降 レジリエンス セルフマネジメント